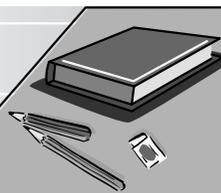


学生時代と図書館 73

— 図書館と留学生活 —

藤倉 なおこ



日本の大学で学部生のときには、テスト勉強をするためにもっぱら図書館を利用していた。他の学生が熱心に試験勉強する姿を見て、すぐにサボってしまう自分をいましめるためであった。静かな館内。無言のプレッシャーをかけてくるたくさん本。なまけものの私にとってそこは絶好の勉強部屋だった。

大学を卒業後、マサチューセッツ州の小さな町にあるアメリカで最も古い女子大学に留学した。白樺の木立があちこちにあるキャンパスにはゆったりと川が流れ、ビーバーがダムを作っていた。こげ茶色の石で造られたツタが絡まる図書館は、教会の聖堂のようで天井が高かった。南向きの大きなステンドグラスの窓からは、真冬でも杉やヒノキの大木に積もった雪の反射でやさしい光が差し込んでいた。その図書館は学生を包み込むようにして「私を利用して勉強するのです」とおごそかに語りかけているようだった。

図書館は毎晩午前2時まで開いていた。「そんな時間まで勉強しなければならないのか！」認識が甘かった私はおびえた。リーディングの課題は、「何頁から何頁」ではなく、「この本とこの本と」だった。アメリカの学生のように英語をskim through（ざっと読む）できない私はそれらを辞書を引き引き、気が遠くなるほどの時間をかけて読まなければならなかった。相変わらず勉強している人を見ないとダメな私は、いつも図書館で勉強していた。

夜間は広いキャンパス内の各学生寮と図書館を結ぶミニバンがあった。図書館が閉まる午前2時には図書館の入口でヨレヨレの上下のスエットを着た女子学生たちが、くたびれた表情でバンを待っていた。ずっと共学で過ごした私はこのとき初めて女子ばかりだとどんなに「身づくろい」に気を配らなくていいかということを目の当たりにし、すぐに会得した。しかし、そうした彼女たちも金曜日の夕方になるとヨレヨレスエットから脱皮し、きれいなお姉さんになって近隣の大学の男子寮で

開かれるパーティーに出かけて行った。私はそれを横目に読んだ分量をつまんでみては、高いドーム状の天井を見上げてため息をつき、相変わらずサナギのまま図書館で過ごしていた。しかし、それは苦ではなく初めて出会った「女性学」にどっぷりと浸った貴重な時間だった。

帰国後しばらく会社に勤めてから、今度はアメリカの大学院に留学した。大学院の図書館は24時間、開いていた。私は再びおびえた。「なぜ1日は24時間しかないのか？34時間あれば寝る時間もあるのに。」プレゼンテーションやレポートの提出が迫るとそれほど勉強は大変だった。

図書館に行くときまず、キーワードで本を探す。“female elderly”、“family caregivers”と入力する。コンピュータの画面に論文や書籍の一覧が表示される。本棚の前に到着すると深呼吸をする。どのような研究がなされているのだろう。どのような新しい発見ができるのだろう。自分が書きたいテーマの本が並び棚の前に気持ちはドキドキである。何冊もの本を抱えて、閲覧室の机の上に積み上げる。本の中には知りたいことが詰まっている。おもしろい本に巡り合えたときなどは、机にもどるまで待ち切れず、その場で本棚の間に座り込んだまま長い時間読んでいた。夜11時になると図書の出し出しが終了になる。直前に慌てて貸出カウンターに並び。朝まで勉強する人たちは1階の広いガラス張りの部屋に集まった。夢中で本を読んでいるとだんだんと空が白くなって夜が明けた。

課題は大変だったけれども、自分がやりたい研究を思う存分できたことはとても贅沢で幸せなことだった。これは大学を卒業し、一旦、社会人として生活を支えるために仕事をするという経験をしたからこそ、味わえた気持ちだったと思う。そしてその幸せを感じる事が一番多かったのは、留学中一番長く過ごした図書館であった。

ふじくら なおこ(専任講師・資格英語)